

## 永明延寿の浄土思想

韓 京洙(宗澤)

(大正大学大学院)

### 一 はじめに

延寿(九〇四―九七五)の浄土思想は、彼の伝記や『宗鏡録』『万善同帰集』『智覚禪師自行録』『神棲安養賦』『棠邦文類』巻第四等の著書を通じて見ることができる。その中で思想はすでによく知られているが如く、唯心浄土と指方立相、事理双修(理事無碍)、禅浄融合である。

『万善同帰集』巻三には菩薩道として十門を開き利他行を進め、浄土思想としつ唯心浄土と指方立相を引き、浄土教の立場を打ち出している。今回私は延寿において彼の基本的な思想に言及した上で、浄土思想がどのような形で展開されたかという問題を考察して見たい。

### 二 延寿の根本思想

彼の著作である『万善同帰集』には事理双修(理事無碍)思想と禅浄融合思想が述べられている。事理双修説は彼が禅浄融合する場合の根本理念となつているが、理において禅、事において浄土ということを明らかに示している。

彼は『万善同帰集』の冒頭で「万法唯心」を示しながら修行者は「諸度（六波羅蜜）を行はずべし、万行をひとしく興らんと欲せば事理に依憑すべき」ことを次のように述べている。

事は理に因りて立つ、理を隠くてしかも事を成ぜず、理は事によりて彰はる、事を壊してしかも理を顕はさず、相資する時は各立し、相摂する時はすなわち俱に空なり、隠顯すなわち互に興り、闕なければすなわち齊しく現す相非相奪する時はすなわち有にあらず空にあらず。相即相成する時はすなわち常にあらず断にあらず、若し事を離れて理を推せば声聞の愚に随し、若し理を離れて事を行する時は、凡夫の執に同じ。まさに知るべし。理を離れて事なし、全て水是れ波なれば事を離れて理なし、全て波是れ水なるも理はすなわち事にあらず、動湿同じからざればなり。事はすなわち理にあらず、能所各異ればなり。理にあらず事にあざれば真俗ともに亡じ、しかも理、しかも事なれば二諦つねに立す<sup>(1)</sup>

事理双修の説は当時の禅宗失意の徒が唯だ理に執して事に迷い、また教家の人が唯だ事に執して理に迷っているのを見て、両者とも偏見に随するものとなし、事理双修、禅淨融合を力説したものである<sup>(2)</sup>。

彼は道場を理道場と事道場に分けているが、理道場とは塵のように無数である国土にあまねく存在するものである。真如によつて理を顯わし、方便によつて事を成ずるものであるという。

また、『万善同帰集』では『上都儀』を引用して次のように説いている。

夫れ三宝に帰命すとは、方を指して相を立て、心を住め境を取らんことを要するも無相離念を明さざるなり。

仏、懸に知りたまう、凡夫の繫心すらな得ず、沉んやと離相をやと。術通なき人、空に居して舎を造るが如し<sup>(3)</sup>。

このように延寿は指方立相を強調しているのである。彼は事理双修を根本理念に置いているが、指方立相の事觀の立場として処理している。

淨土を報土と判じているが、その報土とは阿弥陀仏という報身仏のいる極樂淨土のことである。阿川貫達<sup>(4)</sup>先生は次のように指方立相を述べている。「指方立相とは愚痴の我等に知り易きよう方角を示し形を明らかにしたもので、それは真を表しており、真実を離れたものではない。」という。また藤吉慈海<sup>(5)</sup>博士は「指方立相は真を表すものであるが、真そのものではない。真実を離れないものであつても真そのものとは言えないであろう。指方し立相するものこそ真であつて、指方し立相されたものは、真実なるものの表現であつてそれは真なるものを指し示すものである」という。要するに指方立相とは凡夫のために方角を示し形を明らかにしたもので、それは真実を方便として表現したのである。

延寿は事理双修を『浄名経』『金剛三昧経』『華嚴経』『金剛般若経』『摩訶止観』『智度論』『起信論』等の手許の諸文献を通して裏づけているのであるが、大悲心を起し、諸福徳を修め、方便として衆生を教化し、一切の悪法を止め、三宝を供養し礼拝し、諸仏を讚歎し歎請することを進めている。

事理双修については次のように述べている。

問う、經に云く、ただ凡夫の人、その事に貪著すと。又、云く、取相の凡夫、宜しきに随て為めに説くと。若し理本を得ば、万行ともに円ならず。何ぞ事跡を須<sup>(6)</sup>いて而かも造作を興さむや。

答う。此れは是れ貪着執取を破する文なり、因縁事相の法に干するにあらずと。『浄名経』に云く、ただその病を除いて而かも法を除かずと『金剛三昧経』に云く、二入あり、一には理入、二には行入、理を以つて行を導き、行を以つて理を円にす。又、菩提は、行を以つて無行に入る。行を以つてとは、一切の善法を縁す。無行とは、一切善法を得ず。豈に理に滞して行を虧き、行を執して理に違すべけんや<sup>(6)</sup>。

事理双修の説は飛錫、法照等の諸師によつて唱えられて来たのであるが、延寿は禅の正嫡としてこれを高調したところに特色がある。これは恐く法眼文益の影響であろう。飛錫は『念仏三昧宝王論』の無心念仏理事双修第十五で理

門の念仏と事門の念仏を述べている。法照も『浄土五会念仏略法事儀讃』で念仏三昧理事双修を説いている。延寿は文益の事理相即の思想を受け、曹洞の偏正回互も、臨済の四賓主も華嚴の法界事理相即の説と相通するものとしこれを禅の立場で明らかに示したのである。<sup>(7)</sup>

延寿は利他行として菩薩道行を実践している。彼の著作『万善同帰集』巻六に諸菩薩行を分けて十義となし、一には理事双修、二には権実双行、三には二諦並陳、四には性相融即、五には体用自在、六には空有相成、七には成助兼修、八には同異一際、九には修性不二、十には因果無差の十門を立てている。第一理事双修は彼の根本理念と認められるものである。

彼は天台大師の『金剛般若経疏』と『華嚴経』入法界品を引き、菩薩行を明らかに示している。すなわち菩薩は「無所得を方便となし、有に行じても空に乖かず、真に入っても俗を礙へず」つまり無為の理に住して有為の仏事を作すのである。およそ万善は「これ菩薩の入聖の資糧、衆行は諸仏助道の階漸であり、般若は目の如く、万善は足の如く」のように般若の智目と万善の行足がなければ清涼の地に致ることが出来ぬ。<sup>(8)</sup>『法華経』は会三帰一し万善を菩薩に向けるのであり、『大品般若経』は一切無二として種智に帰すというのである。また『華嚴経』を引き、第七遠行地において、十種の方便慧と殊勝の道とを勧めている。すなわち、

一に善く空無相無願三昧を修するの、而も慈悲を以て衆生をすてず、二に諸仏平等の法を得るも而も楽しんで常に仏を供養し、三に觀空智門に入ると雖も、而も、福德を集め、四に三界を遠離するも而も三界を莊嚴し、五に畢竟して諸の煩惱の焰を寂滅すと雖も、而も能く一切衆生の為に貪瞋癡煩惱の焰を起滅す。六に諸法は幻の如く夢の如く、影の如く響の如く、燄の如く化の如く、水中の月の如く、鏡中の像の如く、自性無二なりと知るも、而も無量差別の隨の作業を起し、七に一切の国土は虚空の如しと知るも、而も能く清淨の妙行を以て淨土を莊嚴し、八に諸の法身は本性無身なりと知るも、而も相好をもってその身を莊嚴し、第九に諸仏の音声は性

空寂滅にして言説すべからずと知るも、而も能く一切衆生に随って種の時、種種の劫数の以て諸行を修すべし。<sup>(9)</sup>

といい、また、『維摩経』を引き、事理双修の菩薩行を明かに示している。すなわち、

『維摩経』には空を行ずと雖も衆の徳本を植ゆ、是れ菩薩の行なり、無明を行ずと雖も而も衆生を度す、これ菩薩の行なり、無作を行ずと雖も身を受くることを現す、是れ菩薩の行なり。無起を行ずと雖も而も一切の菩薩行を起す。是れ菩薩の行なり。<sup>(10)</sup>

菩薩が事觀を以て徳を集めているが、畢竟、衆生を救済するためには一切の善行が必要である。彼は『起信論』分別發趣道相を引き、立志を立て発心することを進めている。『起信論』には発心することを三つ挙げているが、

一には直心、正しく真如法を念ずるが故に。二には深心、樂うて一切もろもろの善行を集むるが故に。三には大悲心、一切衆生の苦を抜んと欲するが故に。論に問う。上に法界一相にして仏体無二と説く、何が故ぞ唯だ真如を念ぜずして、復たもろもろの善法の行を求學することを偈るや。論に答う、譬えば、大摩尼宝の体性明淨にして、而かも鑛穢の垢あり、若し人、宝性を念ずると雖も、方便を以て種種に磨治せざれば、終いに淨を得ること無きが如し。是くの如きの衆生、真如の法、体性空淨にして、而かも無量の煩惱の垢染あり、若し人、真如を念ずると雖も、方便を以て種々熏修せざれば、亦、淨きことを得ることなす。垢無量なるを以て、遍ねく一切の善行を修し、以て対治をなす。若し人、一切の善法を修行して自然に真如の法に帰順するが故に。

『起信論』における実践の教説は、住として「解積分」中の「分別發趣道相」と「修行信心分」に説かれている。その中、「分別發趣道相」は、不定聚の衆生を出発点としながらも、その叙述は主として信成就から証悟にいたる三阿僧祇劫の修道に向けられている。<sup>(11)</sup>

延寿は『起信論』分別發趣道相の中に牛頭法融大師と賢首法蔵の列をあげ、十波羅蜜及び菩薩道を勧めている。菩

薩行として実践方法は善法を強調している。世間、出世間ともに上善を以って根本としている。善法とは

生死海を越ゆるの舟航、涅槃城に赴くの道路たり、人天の基階となり、祖仏の垣壇となる、在庫出塵、暫らくも廢すべからず、十善何ぞ過あらむ、弘むること人にあり、若し貪着する時は則ち果、有漏の天に生れ、執せざる時は則ち位、無為の道に入る。小心を運べば三乗の位に随し、大意を発せば菩薩の階に昇る。乃至、円修を究竟すれば終に仏果を成ず。<sup>(14)</sup>

諸波羅蜜、十善業道、福德を人に勧奨している。『景德伝燈録』『宋高僧伝』は共に禪の立場で伝記を伝えるが、前者が彼を習禅偏に含めるのに対し、それより成立が早い、後者が興福偏に含める点は重要である。

『万善同帰集』には『智度論』を引き、福德を論じている。

『智度論』に云く、仏言く、我れ過去に亦会て悪人小蟲となる、積善によるが故にいまし成仏を得たりと。又、十八不供の中の如く、欲無減と云うものあり、仏善法の恩を知ろしめすが故に、常にもろもろの善法を集めんと欲するが故に、欲、減ずることなし。もろもろの善法を修集して、心に厭足なきが故に、欲、減ずることなし。曾て目しひたる一の長老比丘あり、自ら僧伽梨を縫い、枉脱<sup>い</sup>として諸人に語りていわく、誰か福德をなきむと染い欲する者ぞ、我がためには針に枉せよと。その時、仏、その前に現はれ、語りて言く、我れこれ福德を染い欲して厭足なき人なり、汝が針を持ち来れと。この比丘、斐亶たる仏の光明を見たまつり、又、仏の音声を識りて、仏に白して言く、仏無量の功德は、皆なその辺底を尽したまう。云何ぞ厭足なきや。仏、比丘に告げたまはく、功德果報甚だ深し、我の如く恩分を知る者あることなし、我れ又、その辺底を尽すと雖も、我れ本と欲心の厭足なきを以っての故に仏となるを得たり……<sup>(15)</sup>

延寿が主張した事理双修、事理合行は禪と浄土の關係に結びつけている。禪と念仏を融合して人に勧めたのが、『参禅念仏四料揀』である。すなわち、

一に言わく、禪ありて、浄土なきは十人に九は路に蹉く。陰境若し現前すれば瞥爾として他に随つて去る。謂く単に理性を明らかにして往生を願わず、娑婆に流転すれば則ち退墮の患あり。陰境とは、禪定中に於いて陰境発現するなり。楞嚴に明す所の如くんば、五陰境に於いて五十種の魔事を起す、其の人、初めに魔著を覺知せず、亦自ら無上涅槃を得と言う。迷惑して知ることなく、無間獄に随する者は是れなり。

二に日わく、禪なく浄土あるは、万修万人去る。但だ阿陀を見ることを得、何ぞ開悟せざるを愁えん。謂わく未だ理性を明かさざるも、但だ往生を願ひ、仏力に乗ずるが故に速かに不退に登る。

三に日わく、禪ありて浄土あるは、猶お角を戴ける虎の如し。現世には人師と為り、来世には仏祖と作る。既に深く仏法に達す、故に人天の師と為るべし。又、発願往生して速かに不退に登る。腰に十万貫を纏つて、鶴に騎りて揚州に上る。

四に日わく、禪なく浄土なきは鉄床竝に銅椎、万劫に千と與に生じ、個人の依怙を没す。既に仏性を明らめず、又、往生を願わず、永却に沈淪す。何に由りてか出離せん。生死を超えて速かに不退に登らんと欲せば、当に此の四種に於いて善を撰んでこれを行はずべし。<sup>(16)</sup>

『参禅念仏四料揀』は彼の師、徳韶から口伝を通じて影響されたものであろう。延寿が、第三の禪浄融合を勧めた根拠は、生きては禅智を得て人師となり、死しては念仏の功德によって仏祖となることができるからというように理解される。つまり禪は現世の教え、浄土は来世のための教えと考えているように思われる。<sup>(17)</sup> 禅浄融合は彼が最初明らかに提唱している。

### 三 浄土思想

延寿の浄土観は唯心浄土ということが出来る。彼の著作『万善同帰集』には唯心浄土の語が二ヶ所、『智覚禅師

『自行録』にも一ヶ所があり、次のように出ている。

問う。唯心浄土は周く十方に遍す。何ぞ質を蓮台に托し、形を安養に寄することを得ん。而かも取捨の念を興せば、豈に無生の門に達せん、欣厭の情生ぜば何ぞ平等を成ぜん。

答う。唯心の仏土とは、了心まきに生ず。『如来不思議境界経』に云く、三世一切の諸仏、皆な所有なし、ただ自心に依る、菩薩、若しよく諸仏及び一切法皆な唯心の量なりと了知すれば、随順忍を得る。或は初地に入り、身を捨てて速に妙喜世界に生じ、或は極楽浄土の中に生ずと。故に知るべし、識心まきに唯心の浄土に生ず。境に著せば、ただ所縁の境中に墮す。既に因果の無差を明せば、すなわち心外に法無きことを知る。また平等の門、無生の旨、即ち教を仰いで信を生ずと雖も、其の力量未だ充たず、観浅く心浮きて、境強く習重きをいかにせん。すべからく仏国に生じ、以って勝縁に仗り、忍力成じ易く、速に菩薩の道を行ずべし……<sup>(18)</sup>

ここで延寿が、強調している根本思想は方法唯心を取り入れた唯心浄土である。すでに柴田泰氏が指摘したように二つの点が現われている。すなわち一つは、唯心浄土とは諸仏浄土〔周遍十方〕であって、弥陀浄土に限ったものではない点であり、二つには、力量がなく観の浅い者は仏国土に生まれて菩薩道を行うべきであるという点である。菩薩が諸仏及び一切法を了達して初地に入り身を捨てすみやかに妙喜世界或は極楽浄土に生れることをめざしている。

延寿は又、唯心念仏について次のように述べている。

問う。心外に法なく、仏、去来せず、何ぞ見仏及び来迎の事あらん。

答う。唯心念仏、唯心観を以て遍く方法を該ね、既に境の唯心なる事を了し心即ち仏なるを了す。故に所念に随いて仏にあらずということなし。<sup>(20)</sup>

さらに『智覚禪師自行録』第三十七には、

初夜に慈悲道師安樂世界大勢至菩薩摩訶薩及び一切清淨大海衆を礼し、普く一切法界衆生とともに引導し、衆生

を利濟し、同じく唯心浄土を了することを願う。<sup>(21)</sup>

このように「唯心浄土」という語は『万善同帰集』には二ヶ所、『智覚禪師自行録』第二十一に一ヶ所しか見えていない、しかし禪師立場で使用した「自心と頓悟」の言葉が一ヶ所だけ次のように示されている。

午後<sup>(22)</sup>に禮拜して安樂世界の主なる阿弥陀仏に帰依し、あまねく一切法界の衆生の自心に頓悟し妙浄土を成ぜらんとを願う。

しかし自心という言葉は『宗鏡録』『万善同帰集』に多く使われている。そして『華嚴経』の入法界品を引き、

『華嚴経』に云く、解脱長者、善財に告げて言う、我れ若し、安樂世界の阿弥陀仏を見たまつらんと欲せば、意に墮つて即ち見たてまつれ、乃至、十方の諸仏、皆な自心に由る、善男子、まさに知るべし。菩薩、諸仏の法を修し、諸仏の刹を浄め、衆行を積習し、修生を調伏し大誓願を発す。是の如き一切、悉く自心に由る……<sup>(23)</sup>

として唯心浄土説を主張しているが、極楽浄土に関することはわずか見られるだけであり、したがって諸仏浄土唯心を主張したものと思われる。ここで指摘すべきことは弥陀浄土説を主張しなかったというのではない。又『起信論』を引きながら弥陀浄土への往生の事も言及しているからである。すなわち、

『起信論』に云く、衆生、初めて是の法を学せんとし、正信を求めんと欲するにその心が怯弱にして、此の娑婆世界に往生するを以って、自ら畏る、常に諸仏に値いたてまつり、親しく法を承け、供養する能はざらんか、懼らくは信心を成就すべきこと難しと謂く、意の退せんと浴する者は、まさに知るべし、如来に勝れたる方便ありて、信心を撰受したまう。謂ゆる専ら仏を念ずる因縁を以って、願に随いて他方の仏土に生ずることを得て常に仏を見たてまつり、永く悪道を離ると。修多羅に説くが如く、若し人、専ら西方極楽世界の阿弥陀仏を念じて、修するところの善根を廻向し、願うて彼の世界に生れることを求めば、往生することを得るなりと。<sup>(24)</sup>

これに依って見ても延寿の浄土観は西方浄土とともに認めていたことは事実である。ところが普通には浄土といえ

西方の極樂浄土であり、念仏といえは阿弥陀仏を唱えることであるが、延寿の唯心浄土とはもっとひろい意味での唯心であり、浄土であったものと思われる。彼が唯心浄土思想を引用した經典は『維摩經』の「心浄土説」、『華嚴經』の「唯心偈」「觀經」の「是心是仏」などの經文を使ったのである。柴田泰氏が指摘したように唯心浄土説は本来は諸仏の唯心、諸仏浄土の唯心であった。従つてインド弥陀浄土と全く認められない思想であり、これは中国仏教的な諸仏浄土の唯心である。又『宗鏡錄』二十八卷には『阿弥陀經』を引用しながらも終り部分に「頓悟自心」と「一心法界」の言葉を取り入れており、同二十一卷には慈恩大師『阿弥陀經疏』を引き、「浄土を唯識智を体と為す」といい、天台『觀無量壽經疏』を引き、天台の一心三觀の説を挙げている。これは唯心浄土説を裏づけている。さらに彼は念仏としては高声念仏と行道念仏を勧めている。高声念仏については『宝積經』を引いて、高声念仏すれば魔軍退散すと説き、また『業報差別經』を引いて高声念仏の十種功德を以下のように挙げてゐる。

一には能く睡眠を排り、二には天魔を驚怖さす、三には声が十方に遍ねし、四には三途の苦を息ましむ、五には外声が入らず、六には心をして散乱せしめず、七には勇猛に精進し、八には諸仏が歡喜したまう。九には三昧が現前し、十には浄土に生ず<sup>(26)</sup>

また飛錫和尚の『高声念仏三昧宝王論』を引き、高声念仏の功德と念仏三昧の威力を次のように述べてゐる。

大海に浴する者は、己でに百川を用ゆ。仏名を念ずる者は、必ず三亦を成ず。亦、清珠を濁水に下せば、濁水、清らかならざるを得ざるが如し。仏を念じても乱心に投ぜば、乱心、仏とならざるを得ず。既にこれに契つて後は、心も仏も双亡せばこれ定なり、双照するは慧なり、定と慧と既に均し、亦、何れの心が仏ならざらん、心と仏が既に然なれば万境万縁が三昧にあらずということなし<sup>(27)</sup>。

また『大集經』日藏分を引用して人が或は一日夜、或は七日夜、高声念仏を称することによって業障を消滅してゐる。至心に仏を念ずれば、小念は小仏を見ることができ、大念は大仏を見ることが出来る。大念によって大仏を見る

とは、大声の念仏によって、大仏を見ると理解されているが、大声といつても耳に聞える程の高さの念仏である。

また『増一阿含經』を引き、乳をしぼるわずかな時間ではあつても仏名を称することに無量の功德があるという<sup>(28)</sup>。

延寿の念仏觀は南無阿弥陀仏だけではなく、南無仏を勧めているが、それは散乱の心に南無仏を称すれば仏道に成ずることができるとのことである。特に十方仏、諸仏を認めている。さらに臨終十年の威力を説くのに、百枚の大石も船の上に置けば沈まない、そのように人は本悪があつても、一時念仏によって泥利に入ることはない。小石が沈むのは人が悪を作り、念仏することを知らないで泥梨の中に入るようなものだ、という<sup>(29)</sup>。衆生(凡夫)は罪悪があつても称名念仏を唱えれば、なくなる時に念仏の功德によって極樂世界に往生することが出来る。それは散乱の心から定心に入ることである。

延寿は天台智者大師の説を引き、もっぱら無生の觀法を修するも、成道は衆縁の所成であるから、内因と共に外縁を必要とする。根機が怯弱なる衆生は自力として堪えざるが、外威に依る他力がなければならぬという。

延寿は『宗鏡錄』百卷のなかに浄土教を論じてゐる。『天台觀經疏』や『天台十疑論』をしばしば引用してゐる。また天台山の平田寺で『天台觀經疏』を講じたという記録がある<sup>(30)</sup>。

延寿は『日蓮所問經』引用して次のように述べてゐる。

仏、日蓮を告げたまわく、譬えば万川長く、注いで草木を浮ぶること有らんに、前は後を顧みず、後は前を顧みざるもすべては大海に会するが如し。世間を亦爾り。豪貴富貴ありと雖も、悉く生老病死を冤れんことを得ず。ただ仏性を信ぜざるに由りて、後世人のために更に甚だ因ること劇しくして千仏の国土に生れることを得ること能はず、是の故に、我れ無量壽仏国土は往き易く取り易きと説くも、而かも人は能く往生を修行せず、反えて九十六種の邪道を事とす。我れ是の人を説いて、無眼の人と名づけ、無耳の人と名づく<sup>(31)</sup>。

世間の人は富貴榮華があつても生老病死を冤れることはできない。人は仏性を信せずでなくなる時、千仏の国土に

生れることはむずかしい。なぜなるかは仏様は無量寿仏国土に行くために説法しても衆生は念仏を称えられず九十六種の邪道を信じている。このように延寿はいろいろな比喻を以って浄土教を裏付けている。又『大集月蔵経』を引き、末法の時における浄土門の他力説を強調し、自力説は円満に具足することが難しいと次のように述べている。

我が末法の時に億億の衆生が行を起し道を修するも、未だ一人も道を得る者あらず、まさに今は末法にして、現に是れ五濁悪世なり、ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。まさに知るべし、自力は円なること難く、他力は就り易し、劣士の輪王の勢に附して、四天に飛遊し、凡質が仙薬の功を仮りて三島に昇騰するが如きは実に易行の道となり……。

彼が禪師の立場では頓悟頓修、即心是仏、具性成仏、成正覚等を打ち出しているが、浄土の立場では西方浄土に往生すべき事と共に念仏三昧、他力易行道の浄土門を以上のように勧めている。『万善同帰集』には浄土教の経典として『観無量寿経』『般船三昧経』『称讃浄土経』の引用があるけれども他経典に比して少ない、日本浄土教に多きく影響を与えた善導大師の引用が一ヶ所のみ載せている。『智覚禪師自行録』には一百八事が詳しく記録されているが、誦経行道、礼仏念仏、受持陀羅尼と諸作法すべてに涉り、誦経では『法華経』『華嚴経』『般若経』『大宝積経』陀羅尼、礼仏念仏では十方仏、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏。諸菩薩がその対象となっている。浄土教の関係では阿弥陀仏を念じ、「礼拝」「帰命」しており、唯心浄土まで含めて十七ヶ所が記されるけれども誦経の対象となるべき浄土経典は一つも見い出せない。

『万善同帰集』には懷感禪師の『釈浄土群疑論』を引用して西方浄土の三十種の利益を挙げているが、そこに出る経典は、『称讃浄土経』『観無量寿経』及び『無量寿経』である。『群疑論』を引用した所が数多く見えており、正式に名を挙げた所は三ヶ所、名をあかさずに引用した所が八ヶ所、計十一ヶ所見えている。このように懷感禪師の励声念仏の影響を多分に受けているのがみられる。

延寿は行道念仏と坐念仏の二種の念仏の実践について坐念一口は八十億劫の罪を消するほどであるが、それに比べて行念の功德は無量であると述べて坐念より行道念仏の優越性を認め、坐禅昏昧なる時は行道念仏すべきことを強調している<sup>(33)</sup>。さらに慈悲の影響を受け、禅淨修行における睡眠の覆障を除くためには、念仏、誦経、礼拝、行道、講經、説法等の諸行を勧めている。

延寿の『万善同帰集』三巻は、従来教学を中心とする諸宗派が相反する思想として扱ってきたものを一元化し、戒定慧の三字を以って実践仏教への綜合帰一化をはかったものである<sup>(34)</sup>が、嘗ては法眼禪の正嫡たる延寿が浄土に帰依するようになった動機として伝記では次のように伝えている。即ち彼が国清寺の羅漢堂で「一心禅定」と「誦経万善莊嚴浄土」という二つの闡を作り、それを引いた結果「誦経万善莊嚴浄土」の闡を選びそれを以って浄土に帰依したのである。

#### 四 まとめ

延寿の浄土思想を総合すると①事理双修、②禅淨融合、③唯心浄土と指方立相を挙げることが出来る。  
① 事理双修は理において禅、事において浄土の關係に結びついている。この説は飛錫、法照等の師によって主張したが延寿は事理双修を高調したと思われる。

② 禅淨融合説は初めて慈悲の『略諸経念仏門往生浄土集』で禅淨修業中における睡眠の覆障を除くためには念仏、誦経、礼拝、行道、講經、説法を用いることを勧めているが、延寿は慈悲の影響を受け、『参禅念仏四料揀』の中に禅淨融合説を明らかに示している。即ち生きては禅智を得て人師となり、死しては念仏の功德によって仏祖となることが出来るように禅は現世の教え、浄土は来生のための教えと考えている。

中国の人々には、慧遠—善導—承遠—法照—少康—**延寿**—省常と次第する浄土経の系譜にも蓮社七祖の一人とし

て数えられている。

③延寿の浄土思想は唯心浄土と名づけられている。唯心浄土は唯心浄土に了達するといっても唯心浄土に往生するとはいいていない。唯心浄土思想の典拠、源流として経論は『維摩経』『華嚴経』『大集経』『観無量寿経』『如来不思議境界経』『起信論』等である。このように唯心浄土思想は中国浄土思想の上で主流な浄土観を持って豊富な資料を提供確立させたのである。

唯心浄土説は最初に提唱したのであり、中国仏教では唯心浄土が善導の指方立相より、はるか大勢を占め永い歴史を持っている。

延寿は西方浄土の指方立相も認めているが、機根怯弱の人のために高声念仏、行道念仏、臨終十念を人々に勧奨したのであり、あくまでも聖道門的というべきである。

## 註

- (1) 『大正蔵』四八。九五八。b。
- (2) 『大正蔵』四八。九六一。b。望月信亨。『中国浄土教理史』。法蔵館。三三五頁参照。
- (3) 『大正蔵』四八。九六一。b。上都儀は『大正蔵目錄部』卷五十五。一〇七頁cには「上都雲華寺泳字大観法師。日本国承和五年。入唐求法目錄」とあるが、経本文は経中に失している。また、『仏書解説大辞典』五頁。cでは「奉答皇太子所問諸経了義並牒」のみ載せている。
- (4) 阿川貫達。『浄土宗儀概説』浄土宗宗務庁東京事務所。昭和。三十二年四月。一五六頁。
- (5) 藤吉慈海。平楽寺。一九八三年三月。三三四頁。
- (6) 『大正蔵』四八。九五九。b。
- (7) 服部英淳。『浄土教思想論』山喜房仏書林。一七六頁参照。
- (8) 『大正蔵』四八。九九二。a。

- (9) 望月信亨。『中国仏教教理史』。法蔵館。三三三頁参照。
- (10) 『大正蔵』四八。九五八。c。
- (11) 『大正蔵』四八。九五八。a。
- (12) 『大正蔵』四八。九五九。b。
- (13) 柏木弘雄。『大乘起信論の研究』春秋社。三七九頁参照。
- (14) 『大正蔵』四八。九六〇。a。
- (15) 『大正蔵』四八。九六〇。b。
- (16) 『統蔵経』一〇八卷、六十七頁。下。
- (17) 藤吉慈海。『浄土教思想の研究』平楽寺。六五一頁参照。
- (18) 『大正蔵』四八。九六七。a。
- (19) 紫田泰。『日本印度学仏教学研究』。三十二卷二号。四二四頁。
- (20) 『大正蔵』四八。九六七。a。
- (21) 『統蔵経』一一一巻七十九頁。下。
- (22) 『統蔵経』一一一巻七十九頁。上。
- (23) 『大正蔵』四八。九五八。b。
- (24) 『大正蔵』四八。九六六。c。
- (25) 紫田泰。『日本印度学仏教学研究』三十七巻二号、一〇六頁参照。
- (26) 『大正蔵』四八。九六二。b。
- (27) 『大正蔵』四八。九六二。b。
- (28) 『大正蔵』四八。九六二。a。
- (29) 『大正蔵』四八。九六七。a。
- (30) 池田魯参。『駒澤大学仏教学部論集』十四巻。昭和五十八年。趙宋天台学の背景―六三頁参照。
- (31) 『大正蔵』四八。九六八。a。



- (32) 『大正蔵』四八。九六八。b。
- (33) 『大正蔵』四八。九六四。b。
- (34) 中山正晃。『日本印度学仏教学研究』二十五卷二号。―祖師禪と浄土教―二六八頁参照。

執筆者紹介

- 中村 元 東方学院院长・東京大学名誉教授
- 西村 公朝 東京芸術大学名誉教授・元美術院国宝修理所所長
- 木村 清孝 東京大学教授・文学博士
- 金 知見 国立韓国精神文化研究院教授・文学博士
- 金 永晃 大正大学大学院
- 韓 京洙 大正大学大学院

会 報

○総会

日時 一九八八年七月十一日(月)  
 場所 東京駒澤大学第二研究館大学院研究室  
 出席者 金世燈、李双錫、李泰昇、陳本寛、釋悟震(以上駒澤大学)、康富重、金英燾、金永晃、全宗釋、韓宗澤(以上大正大学)  
 (委任状)  
 張戒環(仏教大学)、崔庚満(愛知学院大学)、金鍾三(大正大学)、李学洙、全致洙(東京大学)

議題

- 一、経過及び会計報告  
 会長釋悟震(漢益)より経過及び会計報告がなされ承認された。
- 一、新年度研究活動に関する意見交換
- 一、名誉会員推挙の件  
 昨年度までの名誉会員推挙制度に問題点があるとの議論により、全名誉会員の各人の意志の可否に従って推挙することに決議。  
 会議終了後、懇親会を開く。

○名誉会員

去る七月総会の決議により名誉会員全員に総会の結果を報告すると共に、名誉会員受諾願書を発送した結果、八名が快諾書を送って下さった。従って、先の総会の決議により次の方々は名誉会員として推挙され自然成立された。

(名誉会員紹介)

金知見 韓国精神文化研究院教授